

春 たんぽぽのちえ（ふれあいの村 カントウタンポポ）

ふれあいの村は、野外教育センターとして開所以来約半世紀になります。その当時植栽された76種類約1400本の樹木が育ち、里山らしい雰囲気のある森になりました。木漏れ日のさす環境を好む春の妖精、カタクリやニリンソウが育ち、最近減少の著しい在来種のカントウタンポポも少しずつ増えてきました。

大きなトウカエデの株元に生えているカントウタンポポは、この恵まれた環境で年々その株を大きくし早春に黄色の可憐な花を咲かせています。セイヨウタンポポのように自家受粉は出来ませんが、チョウやハナアブ、ハチなど昆虫の力を借りて受粉し仲間を増やしています。花は早春から初夏の短い期間に咲きその中で工夫しながら種子を飛ばし新しい環境の中、困難に負けないで仲間をふやしています。



①カントウタンポポは日当たりの良い村内のあちらこちらに生えていて、肌寒い早春から美しい黄色の花を咲かせます。



②春の女神ツマキチョウ、ハナアブなどが吸蜜するが、その時に同じ仲間の花粉と受粉し種子を作ります。



群生するカントウタンポポ



← 総苞片

カントウタンポポは、日本にもともとあった在来のタンポポ。総苞片が反り返らないのが特徴。春に花が咲き昆虫（写真ツバメシジミ）の受粉によって種子が出来ます。種子はセイヨウタンポポよりも大きく重くて数も少ないです。



セイヨウタンポポは、外来種で都市化と共に繁殖が著しいです。いつでも花を咲かせ単為生殖でも繁殖できます。総苞片が反り返るのが特徴で、種子は小さく軽く遠くまで飛び数も多いので繁殖しやすいです。



③花は、天気の良い日に次々と咲きます。1つの花は2～5日ほど咲いていますが、その後黄色の花の部分はしぼんでしまい、だんだん黒っぽい色になっていき重そうに傾きはじめてます。



④花の茎は、長く伸び重そうにぐったりと地面に倒れていますが、茎の色は変わらず前よりも少し太く長くなっています。これは花と茎に水分や栄養分を送っているからでしょう。



⑤重そうに倒れていた花は総苞片の中に白い綿毛を作ります。綿毛の一つ一つは種を遠くへ飛ばすため落下傘のような形になります。



⑧反対に雨降りの日や湿り気の多い日は、綿毛はすぼんでいます。綿毛が水分を含み湿って重くなるからです。こんな日は、遠くへ飛ぶことが出来ないのじっと我慢し晴れる日を待っているのでしょう。



⑦茎を伸ばし背が高くなれば、綿毛に風が当たりやすくなり遠くまで種を飛ばすことができるようになります。晴れた風のある日に綿毛の落下傘は、精一杯に開き一斉に遠くへ遠くへと新しい所へ夢を持って旅立っていきます。



⑥それから2週間ほど経つと、倒れていた花の茎が、次第に真っ直ぐに起き上がり、背伸びをするようにぐんぐん伸びていきます。茎は前よりもずっと太くなり、まるで太陽に向かって伸びているようです。

カントウタンポポは、キク科タンポポ属の多年草です。冬はロゼット状で過ごし2月～5月頃に黄色の良く目立つ花を咲かせます。花が咲く種子植物の仲間、胚珠が子房に包まれる被子植物です。子葉が2枚出る双子葉植物、花弁がくっついている合弁花類でヒマワリやコスモスと同じキク科の仲間です。小さな頭状花をよく見ると幾つもの花弁がくっついているのが分かります。野原や道端で普通に見られていましたが、最近は、都市化やコンクリート化の波に押されて次第に減少しています。

2年生の教科書に出てくる「たんぽぽのちえ」は、セイヨウタンポポの話ですが、カントウタンポポも同じように知恵を働かせているのです。数年前、横浜市立本町小学校で自然観察会を行いました。体育館の脇でカントウタンポポを見つけた時は、驚きと共に学校の中の自然度の高さに先生方と共に感動したことを覚えています。「たんぽぽ」は、教科書に掲載されている事ばかりではなく都会の中にあっても長い歴史を乗り越えて花咲く素晴らしい知恵が隠されているような気がします。

愛川ふれあいの村のカントウタンポポもいろんな苦難を乗り越えて皆様方にお会いできる日を待っています。
(2021年2月10日カントウタンポポの花が咲きました。) 編集：学芸員吉田文雄・石川雄馬・高梨淳一